漢字は言葉よりも覚えやすい

一歳半の赤ちゃんだったら、普通、“うんま”“まんま”“てーて”“たーた”というような幼児語が 30～40 語言えるのがやっとである。ところが、生後十ヵ月頃から漢字カードで漢字を教えられた田中庸介君と又吉孝旨君は、一歳半の頃には、三百語の漢字を理解し、読んだのである。

二人とも私がそれを確認したばかりでなく、庸介君の場合は朝日新聞東京本社の記者が、孝旨君の場合は沖縄タイムスの記者が、それぞれこれを確認し、各新聞紙上にこれを報道している。明らかに、幼児にとっては、漢字の方が言葉よりも覚えやすいのである。

それは信じがたいくらい意外なことに思われるだろうが、よく考えてみれば、どなたにも納得できる理由が存在する。その第一は、言葉は口から発せられると同時に消滅してしまう存在なので、発せられた瞬間にこれをとらえ、かつ覚えなければならない。

しかも、言葉は、いくつもの音声が一定の順序に並んで組立てられていて、最初の音声の正体さえはっきりとつかまえられないうちから、次々にとび出て来る異なった音声を、その順序を違えずに受け取り、かつ頭の中に貯えなければならないのである。

さらにその上、そういう音声の一定の連なりを聴覚中枢に貯える一方、それに対応する意味内容（多くは視覚的な存在）を別の感覚中枢に貯え、この両者を連絡させなければならない。言葉を覚えることは、このように大変な仕事なのである。

これに比べたら、漢字を覚えることなどお話にならぬくらいやさしい。例えば、“花”という漢字は、その内容である花そのものと同じ視覚的な存在であって、記憶に納まるまで、決して消えることなく待っていてくれる。だから必ず覚えられるのである。

また、言葉は時間的連続的な信号なので、それを聞いている間は一瞬の油断も許されない。途中の音声を一つでも受け取りそこねたらおしまいである。ところが、漢字は、一瞬のうちに把握できる空間的な図形である。しかも、その図形が頭の中に確実に納まるまで待っていてくれるのである。

だから、言葉だと 30 か 40 しか覚えられない幼児が、漢字だとその十倍も覚えられるのである。